

感

想

六 疊 よ り

わ

か

な

彼がこの六疊の主人となつてから早いものだ、もう春夏秋を過して冬がつい目の前に来て居る。

新しき部屋にも少し馴れて來ぬなれたる故になは淋しけれ  
こんな歌をノートの端に書きつけて淋しがつて居たのは何時頃であつたらうか、今ではもう自分の住所はこの外にはない様な氣さへして居る。麗らかな日のさす日は明くつて住心地がいゝ、黄昏の影が向ひの檻の植込から迫つて来る頃は部屋中は淡い哀愁にとぢ込められる。黄昏の色調がたまらなく好きな彼はいつか聞いた薄明の詩人リルケの事など考へることもなしに考へて居る、後の方でピンといふ音がして電燈の光が部屋中に漲つて了ふ。下女は「又か」といふ様に「ホゝ」と軽く笑つて黄昏の世界を破壊して改めて夜の國を建設して行くのである。

部屋全體は潤ひをおびた様ななつかしい色に光る。彼はまた淋しさうな眼をあげてちつと部屋の中を見つめて居る、床の間には彼にはあまり係りのない中古の山水の軸が八ヶ月一日の如くかゝつて居る、右手には辭書類が貧弱な書棚の補をこゝに求めて並んで居る、左手にはモナリザが彼を嘲る様にちつと謎の眼を見張つて居る、しかしあ目出い彼には別に何とも感じないらしい、毎朝感心に塵を拂つてやる事を忘れない。

床柱の神代杉の短冊かけは彼が先生として尊敬淺からざる歌人の綺麗な墨色匂ふ薄青い短冊を挿んで居る

飾といつては何もない極めて淡泊な書生部屋である、部屋は南向で一間の窓の前には卵形の小さい池があつて金魚の泳いでゐるのが寒さうである、少し艶を失つた少女椿の葉はもう冬の近い事を語つて居る。彼は此窓に机をおく、そして緑色の机掛をかけて居る、五月の草の燃えたつ色をなつかしんだと云ふが、彼がこれを買つて來た日は泣きたい様な心持を抱いた日であつた、とにかく彼にしては珍らしく明るい色を選んで居る。其上には四五年前お上りさん時代に買つた穀風景な硯箱が鎮まつて居る、小さい硝子のインクスタンドは何ういふわけか彼が大變大事にめでいとほしんで居るものである。

机の傍には貧弱な書棚がある、彼は時に嘆息して曰く「まるで山伏の笈の様だ」と、しかし中々新しいのを買はない所を見るどあてもなしに寄附する人でもないかと待つてゞも居る様に思はれる、内容は新陈代謝がさう烈しくはないが時々新しい本の立てられるのを彼は何よりも嬉しさうに眺める、それから淋しさうな顔をして嘆息する、彼が夏休中によむべき筈の千頁餘の厚い本はまだ半分位の所に葉を入れたまゝ黙して居る。まだ手をつけてない英書も三四冊はある。彼はよく「時間と力さへあれば」かういつてグッタリする時もある。或時は追ひかけられる様な勢でよんとゆく、少し御機嫌の斜な時には本を展げたまゝ涙ぐんだ眼で動かない周囲をみて居る、みて居るのか考へて居るのか彼自身にさへ分つては居ない。

彼は時々悲しみに囚へられる、併し彼の悲しみは深夜の悲哀でもなく眞晝の悲哀でもない、やつぱり黄昏の悲哀である。彼の悲しみはまだ／＼淡いものである單純なものである、従つてその涙もきれいなものである純なものである。自分では一步人生にふみ出した積りで居ても「何うして／＼そんな單純な頭で——無論きれいな頭をお亂しなさいとは申しませんけれど」彼の先輩がこんな事を云つた事もあつた。しかも彼はそ

の單純なのに満足して居る、なるべくきれいに世を見て綺麗に生活して行きたいと願つて居る。深酷なごといふ事は彼とは世界を異にして居た。彼はほんとによい、時々かうして帝都の真中にたつた一人で生活して居るといふ事に限りない不安さへ抱く事がある。彼は小羊の様におど／＼して居る。彼には何うしても太陽の様な信仰すべき力がなくてはならなかつた。

彼の外界との交渉には常に喜びと淋しみとがつきまとつて居た。彼は割合に義務心には強いと見えてぞんな場合でも務めに出なければならぬ時刻が来ると恰かも之れが前世から定つてやも居たものゝ様に何の疑ひもなく平氣な顔をして出てゆく、彼も人間だ、時にはほんとにく行きたくない朝もないではないのだけれど。

かうした彼の生活から手紙といふ色彩を除いたらどんなに哀れな淋しいものだらう、一日に三本等受取る日があると喜び極つて涙が出る、そして明日の淋しさを思ふ贅澤までする。今日は來さうだといふ豫覺のある朝は窓の戸を開けてゆく、豫覺が單に豫覺に止る日も多いので彼は歸つて来る時々は悲觀して丁つて袴もぬがないでべつたり机に座つて動かない事もある。時には何となくはすんだゴム毬の様な軽い氣持で外に出てゆく事もある、けれども自由の身になつて見ると慕つて居た外界といふものもさう有難くなくて日曜の日でも一日座り込んだりお洗濯などを殊勝げにボチャ／＼する事もある。人間を非常になつかしがる彼はまた自分之外に頼るものゝない冷たい涙に裏切られる事があるのでそれを大變恐れて居る。

彼の淋しい性質は孤獨を喜ぶと共に客の來るのを非常に喜び迎へた。出入する人は彼の狭い交際範囲ではきまつて居た、淺く廣く交る事の嫌な彼は狭く深くゆきたかつたのである。彼には男の友達はなかつた。日

曜や夕方など一人の時の彼とは全く別人の様な彼を友人の間に見出す事も屢あつた。常には居るか居ないかもわからぬ様な静かな部屋の空氣は若い談笑の聲にとよもされる。彼は自分ながら大人しいと思つた、物足らないと思つた、そして強く生きたいと願つた恰かもニーチエのその様な要求から。

とに角彼は六疊の主人たる事に満足して居る、時には一握の土を所有してみたい等と慾ばる事もあるけれど。そして彼は静かに來るべき此部屋との別れの日などを考へて居る。——四、一、一二四、夜

A countenance in which did meet  
Sweet records, promises as sweet;  
A creature not too bright or good,  
For human natures daily food;  
(Wardsworth)